2005 年 10 月 4 日

報道各位

新日鉱ホールディングス株式会社

―　新日鉱グループ創業 100 周年記念事業　―

日鉱記念館リニューアルオープンおよび清水社長講演会について

当社（本社：東京都港区虎ノ門二丁目、社長：清水康行）は、1905 年（明治 38 年）に創業者・久原房之助が日立鉱山を開業して以来、本年 12 月に創業 100 周年を迎えますが、このほど、その記念事業の一つとして、かねて取り進めてまいりました「日鉱記念館」（所在地：茨城県日立市宮田町、館長：木村信浩）のリニューアル工事を完了させました。昨 10 月 3 日、樫村日立市長をはじめとする地元の関係者や当社の野見山会長、清水社長らが出席してオープニング式典を行うとともに、本 10 月 4 日から一般公開を再開いたしました。

また、同日、オープニング式典に先立ち、清水社長の「日立の産業生誕百年記念講演会」（演題「日立で生まれ、世界にはばたく新日鉱グループ――日立鉱山伝来の経営哲学を受け継いで 100 年」）が、同市内のホテルにおいて、日立市民、同市所在企業など約 400 名の聴衆を集めて開催されました。(別紙１参照)

日鉱記念館は、1985 年（昭和 60 年）に、当社の前身である日本鉱業株式会社が創業 80 周年を記念して日立鉱山跡地に建設した企業博物館であります。ご高承のとおり、日立鉱山の開業は、工業都市・日立市の発展の原点でもあり、また茨城県近代鉱工業の発祥でもありますが、日鉱記念館においては、同鉱山の創業や歴史をはじめ、鉱山伝来の「地域社会との共存共栄」、「相互依存と相互信頼の労使関係」等々の精神・気風を紹介するとともに、これらをグループ社員はもとより、広く一般に公開し、新日鉱グループの経営理念や事業への理解を深めていただくことに努めております。

この 20 年間における来館者は、地元日立市の小中学生・高校生をはじめ、大学、企業、官公庁等の関係者など、延べ 21 万 6 千名、年間 1 万人超に達しております。

今般のリニューアルにあたりましては、設備・展示物の全体的な見直しに加え、写真・ビデオの活用によるビジュアル化や可能な限りのバリアフリー対応に努めました(別紙２参照)。さらに、これを機会に、日曜日での開館を従来の隔週から毎週に改めました(別紙３参照)。

このように、日鉱記念館をハード、ソフト両面から充実させたことにより、従来に増して我が国産業史や鉱業史、さらには日立の郷土史に資するとともに、より多くの方々にご来場いただけることを期しております。

なお、今次リニューアルに合わせ、新日鉱ホールディングスのホームページにおいて、日鉱記念館を紹介するコーナーを設けました。(http://www.shinnikko-hd.co.jp/museum/)

以上

【お問い合わせ先】

新日鉱ホールディングス㈱総務グループ（横小路、高元、花島）　TEL.03-5573-5125

本講演会は、「第 13 回世界地方都市十字路会議実行委員会」の主催により、平成 17 年 10 月 3 日(月)13:30 から「ホテル日航日立」(茨城県日立市)において開催されたものです。

清水社長講演要旨

「日立で生まれ，世界にはばたく新日鉱グループ」
－　日立鉱山伝来の経営哲学を受け継いで 100 年　－

１．はじめに

新日鉱グループは、1905 年（明治 38 年）に、創業者・久原房之助が日立鉱山を開業して以来、本年 12 月をもちまして、100 年の節目を迎えることができます。発祥の地・ここ日立の皆様の絶大なるご支援・ご鞭撻の賜物と、深く感謝申し上げます。

２．「草創期における日立鉱山イズム」～「天のとき」、「地の利」、「人の和」

日立鉱山の発展を支えた要因として、いわゆる「日立鉱山イズム」があります。そして、草創期において、「天のとき」、「地の利」、「人の和」に恵まれたことが大きな要素として挙げられます。

①「天のとき」

日立鉱山が後発ながらも短期間に発展することができたのは、当時、日本の産業全体が一大躍進期を迎えたことが背景にあります。まさに「天のとき」に恵まれたわけですがそれは、近代的な経営観の下、新しきもの・良きものを求めた企業家魂を持ち、先見の明豊かな久原自らが引き寄せたものでした。

②「地の利」

久原は、巨額の建設費と多くの人員を投じ、社運を賭して、当時世界一の高さを誇る 155.7 メートルの大煙突を建設し、結果、煙害を激減させました。この大煙突は、「工都日立の街と企業との共存共栄のシンボル」となりました。また、日立鉱山は、被害への補償は当然なこととして、さらに一歩踏み込み、荒れた山野を緑に戻すことに尽力し、合計約 1000 万本もの桜を植林しました。

こうした日立鉱山の煙害対策は、「非を非として認め、企業としての道義的責任を根底に据えて、事に対処する。地域の理解と支援なくして鉱山の発展はありえない。地域社会の発展にも貢献していく。そして、そのためにはいかなる労も惜しまない」という久原をはじめとする先達の経営姿勢を表すものでした。

しかし、それ以上に、利害相反する立場にありながら、こうした鉱山側の姿勢を真正面から受け止め、企業との共存共栄を心して事の解決に努められた地域住民の方々、更にはその意思を受け継ぎ、大煙突を街づくりのシンボルと捉え、その後の鉱山の発展に絶大なご支援を下さった日立の人々があってこそ、鉱山は発展を成し遂げることができました。日立に鉱山を求めたことこそが、久原が得た最大の「地の利」でした。

③「人の和」

久原は「人の和」にも恵まれました。とりわけ、竹内維彦、小平浪平、角弥太郎といった、小坂鉱山時代に久原に心酔し、日立に馳せ参じた、いわゆる「小坂組」と称された精鋭達です。日立鉱山の驚異的な発展は、大局観に満ちた創業者・久原のみならず、その久原を慕っ

て群を成した俊英達の存在抜きにしてはありえず、「企業は人なり」は昔も今も不変であることを改めて認識させられます。

３.新日鉱グループの経営の変遷と現況

新日鉱グループの前身にあたる日本鉱業は、昭和 30 年代半ばまでは、日立鉱業所を中心とする鉱山・製錬事業を主体としていましたが、その後、石油事業を拡充し、非鉄金属と石油を主事業とする、いわゆる「金石両輪経営」を行ってきました。その一方で、昭和 50 年代後半以降の円高急進と産業構造の変化を背景に、業容拡大を期し、新素材分野へも積極的に展開していきました。

平成に入り、金属、石油、それぞれの事業特性に応じた独自の運営を行うため、金属部門を分離し日鉱金属として独立させました。そして、共同石油と合併して製販一体の石油会社・日鉱共石とし、1 年後に社名を改称してジャパンエナジーとしました。

ジャパンエナジーと日鉱金属は、経済・産業のグローバル化により、連結経営の強化や経営資源の一段の効率化を求められるなか、2002 年（平成 14 年）9 月、純粋持株会社・新日鉱ホールディングスを設立し、石油、金属、電子材料をコア事業とする新日鉱グループを発足させました。現在、新日鉱ホールディングスは、その後金属から独立した金属加工を含め、4 つの事業をコアとする、他に類を見ない異業種の持株会社経営を推進しています。

新日鉱グループの製品は、石油、石油化学、非鉄金属、電子材料等の基礎素材であり、世界の産業や私たちの生活を支えています。また、その事業は、日立に発して 100 年、今や世界を舞台にしています。原料調達から、生産拠点、販売拠点は、環太平洋を中心に、アジア・米州・欧州・中東へと、地球規模で広がっています。

新日鉱グループは、既に 100 年前からここ日立において CSR を実践していました。日立の皆様による懐深い「地の利」に甘えることなく、大煙突や桜に象徴される「地域社会と共に歩んだ」軌跡を顧みますと、新日鉱グループは 100 年の計、すなわち今で言う CSR をここ日立で育み、それが現在の発展につながっているとの思いを新たにします。

４．おわりに

今般リニューアルした日鉱記念館の存在意義の大きな一つに、日立で醸成された「地域社会との共存共栄」や「相互依存と相互信頼に基づく労使関係」の精神・哲学・実行力を後世に伝えることがあります。再生なりました日鉱記念館を一人でも多くの皆様にご覧いただけますことを願っています。

なお、新日鉱グループは、今般の創業 100 周年にちなみ、日立市に対し、次の時代を担う子供たちが環境や自然を学び研究するための活動や市民の憩いの場づくりにご支援させていただくこととしました。

おわりに、日立の街の更なるご発展・ご繁栄とここにいらっしゃいます方々をはじめとする日立市民の皆様のご健勝を心から祈念申し上げます。

以上

（別紙２）

日鉱記念館の主なリニューアル内容

・大煙突コーナーの設置

日立鉱山創業期における煙害問題の解決策として鉱山が講じた大煙突の建設にまつわるエピソードを中心に、企業と地域住民が力を合わせて苦難を克服した経緯等を映像や写真とともに紹介します。

・映像スペースの設置

1950 年代の「鉱山町の暮らし」や当時の市民の足であった「鉱山電車」の懐かしい映像を最新鋭の大型プラズマディスプレイにて上映し、かつての鉱山での人々の生活を紹介します。また、1960 年代の「鉱山の仕事（銅ができるまで）」も映像化しました。

・鉱石実感コーナーの設置

模擬坑道内に本物の鉱石を置き、手に取って実感することができることとしました。

・和英併記パネル等の設置

海外からの来館者向けに、本館内のパネル解説や映像キャプションにおいては、和英併記としました。

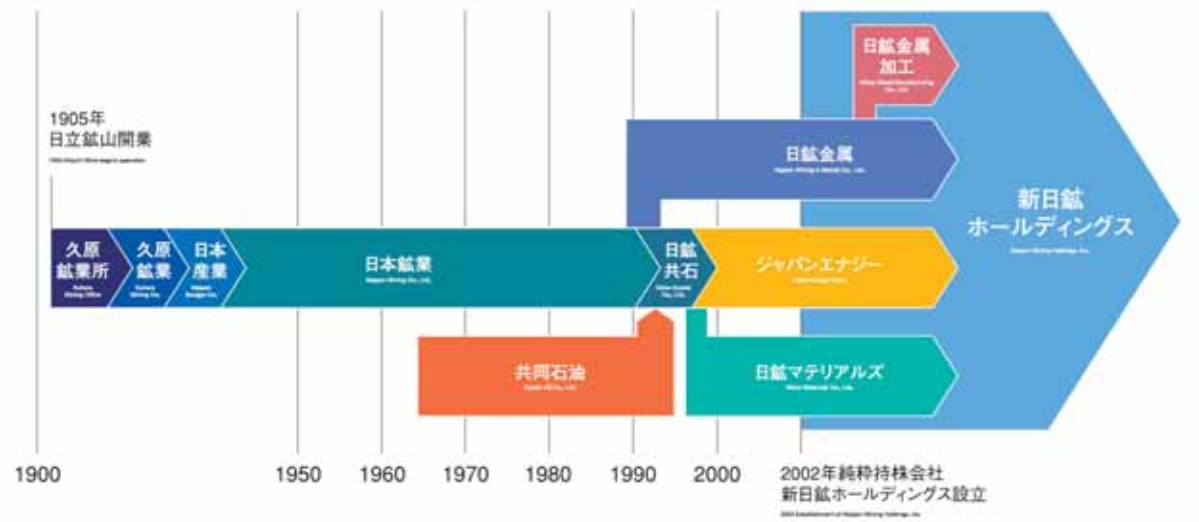
・バリアフリー対応

休憩コーナー、車椅子用の昇降リフト・トイレなど、可能な限りでのバリアフリー対応を施しました。

以上

（別紙３）

■新日鉱グループの沿革



1905（明治 38）年 12 月 26 日	久原房之助、赤沢銅山を買収し、日立鉱山として開業（新日鉱グループの創業）
1912（大正元）年 9 月 18 日	久原鉱業株式会社設立（個人経営の久原鉱業所から株式会社へ）
1928（昭和 3）年 12 月 29 日	久原鉱業株式会社を日本産業株式会社に改称
1929（昭和 4）年 4 月 24 日	日本産業の鉱業・製錬部門を分離・独立し、日本鉱業株式会社設立
1965（昭和 40）年 8 月 10 日	共同石油株式会社設立（日本鉱業を筆頭に、アジア石油、東亜石油の石油販売部門統合）
1992（平成 4）年 11 月 1 日	日本鉱業の金属資源開発・金属・金属加工部門を分離独立し、日鉱金属株式会社営業開始
1992（平成 4）年 12 月 1 日	日本鉱業と共同石油が合併し、株式会社日鉱共石発足
1993（平成 5）年 12 月 1 日	株式会社日鉱共石が株式会社ジャパンエナジーに社名変更
1999（平成 11）年 7 月 1 日	日鉱マテリアルズ設立（2003 年 10 月から電子材料事業の製造・販売一貫体制）
2002（平成 14）年 9 月 27 日	ジャパンエナジーと日鉱金属が純粋持株会社・新日鉱ホールディングス株式会社設立
2003（平成 15）年 10 月 1 日	日鉱金属の金属加工部門を分離・独立し、日鉱金属加工株式会社設立

■日鉱記念館の概要

所　　在：茨城県日立市宮田町 3585 （日立鉱山跡）
敷地面積：約 2 万㎡
総床面積：約 1,500 ㎡ （本館部分）
本館構造：鉄筋コンクリート2階建て1棟
概　　要：日鉱記念館は、本館とその他施設からなる集合施設です。本館の1階は、久原房之助・鮎川義介の事跡、日立鉱山や新日鉱グループの歴史および鉱山のくらしを展示しています。地階には坑内を再現した模擬坑道があります。2階は、日立の大煙突や新日鉱グループの現況を展示しています。その他施設としては、茨城県の文化財（茨城県産業史跡第1号）である旧久原本部、さく岩機や鉱石のコレクションを有する鉱山資料館、塵外堂、第1竪坑・第11竪坑、電気機関車などを配しています。
休 館 日：月曜日、祝祭日、年末年始など
開館時間：午前9時～午後4時 （入館受付は午後3時30分まで）
入 館 料：無料
電　　話：0294-21-8411
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ：http://www.shinnikko-hd.co.jp/museum/

以上

（ご参考）

日鉱記念館オープニング式典におけるテープカット

オープニング式典後の館内見学

（写真左から，樫村千秋 日立市長，野見山昭彦 新日鉱 HD 会長，清水康行 新日鉱 HD 社長）